

追悼



高岩仁さんを讃えて

高岩仁さんの仕事・人となり

記録映像作家 映像文化協会代表

- 1935年 福岡生まれ
- 1957年 東映株式会社入社
- 1969年 フリーカメラマンとなる
- 1971年 映画「どぶ川学級」撮影
- 1975年 記録映画を主にテーマを追って制作し世に問い続ける
公害を告発し反対するためのドキュメント
「公害原論」「水俣一揆」「実録公調委」など
在日韓国人に関する様々な運動のための記録映画
「江戸時代の朝鮮通信士」「解放の日まで」
- 1979年 社会主義国の革命の成果を伝える記録映画
「ユンカーさん」「友好の旅」「レーニンに学ぶ」など
- 1989年 現在の教育の問題と戦争の真実を追究する記録映画
「日の丸・君が代」など
- 1990年 日本による過去と現在も続くアジア侵略の実態と侵略戦争の社会構造的
原因を追求する「教えられなかった戦争」シリーズ
～マレー半島編・フィリピン編・沖縄編・第二の侵略・
中国編 他～
- 2008年1月29日 突然の逝去 72歳
肝細胞癌を宣告されて2年、とてもお元気に活躍中で、シリーズの韓国編
の準備中のことでした

目次

高岩仁さんを哀悼して

富盛保枝	心からの拍手を！	1
笠井一朗	追悼文 高岩仁さんへ	1
荒木 尊文	高岩さんはマルクス主義者か？	3
上野 白湖	高岩仁さんへの哀悼と感謝	4

高岩さんの作品を見て思ったこと (会報などに所載済み)

合田 恵子	教室のビデオ「戦争案内」から「君が代」へ	5
荒木 尊文	「戦争案内」—すごいビデオがあった	6
上野 白湖	私の小さな一歩	9～7

高岩仁さんのことば

ブックレット「戦争案内」より

現代の戦争を防止する究極の方法は、資本主義という社会のシステムを変えるしかないと思います。つまり経済のシステムを変えることです。物を人に造らせて金儲けをして経済発展するというシステムをやめて、皆で何をどれだけ造ったらよいのか考えて、皆が自分の能力に応じて労働して、出来上がった物を皆で平等に分け合うという社会システムにすれば、戦争を起こす根本原因を完全に排除することができます。

心からの拍手を！

富盛 保枝

高岩さんの映像に初めて接したのは、今から十数年前に自主上映した、教えられなかった戦争シリーズの第一弾「侵略マレー半島」だった。戦争の本質を見事に描いていた。

日本軍の住民虐殺を証言する男性が、自らの体の傷跡を見せるシーンが今でも頭に焼き付いている。子供から大人まで300人以上が観た。

すっかりファンになった私は手紙を出したり、沖縄篇は札幌までとんで見に行った。

ある時「『第二の侵略』が完成したので北海道を回りたい」と電話があり、来蘭した。急なこともあって小さな集まりだったが、試写のあと質問がとびかい、その後のヤキトリ屋でも盛り上がり「室蘭にもう一度来たい」と、すっかり気に入ったようだった。

ホテル代も出せなかったので、店の二階に泊まってもらった。朝、ニコニコして元気に散歩していた姿が忘れられない。

次の仕事への闘志も満々だったのに……。地味だが貴重な仕事を精一杯なしとげられた高岩さんに心からの拍手を送りたい。

追悼文 高岩仁さんへ

笠井一郎

1935年生まれの高岩仁さんは、自称「映画屋さん」です。25歳頃から映画を撮り続け、56歳頃から「教えられなかった戦争シリーズ」の制作を始めたそうです。2003年9月30日、室蘭にて「高岩仁さんを囲む会」でお会いしました。ちょうど中帰連（中国帰還者連絡会）の方を取材しに北海道にいらっしゃったのだそうです。周恩来の理念に基づき、撫順戦犯管理所にて自分らの犯した行為を自己批判できるまでにいたり、無罪放免され日本に帰国した旧日本軍戦争捕虜の人たちです。後に彼らは日本の体制により「アカに洗脳された人たち」とレッテルを貼られ、迫害を受け続け、今日に至っていますが、、、

その時の彼は68歳でした。映画のタイトルは「第二の侵略」、現在進行形の植民地主義を描き出すものでした。舞台はフィリピンです。ビデオの中で、大学教授やMILF（モロイスラム解放戦線）議長へのインタビューがありましたが、いずれも「class conflict（階級闘争）」という言葉を使っていました。フィリピン政府は、経済開発特区を確保するために、フィリピン軍を使って空爆で無辜の市民を追い出すのです。それはメディアでは、テロ（イスラム過激派）掃討作戦といわれます。ちなみに冷戦時代、MILFは共産ゲリラと呼ばれていました。今も、政府のプロパガンダによって彼らは過激な武装集団であると宣伝されているのです。

米帝国政権が東南アジアに植え付けた占領開発政権（インドネシア・フィリピン等々）の基盤作りに必要な軍事作戦の基地として、沖縄が要であること。日本の経済発展はIMFの紐付き援助によるところが多であり、何も日本人が優れているからという理由ではないこと。資本主義は本来的に軍事力に依拠したものであること、などなど具体的な事例や数値を含めてお話し頂きました。ややもすると日本の平和運動は、戦争の悲惨さ、非人道性ばかりに着目する傾向があるが、戦争の起きる原因である資本主義のシステムにまで考慮に入れないといけないと、諭していただきました。

資本主義の基盤である植民地主義や、対テロ戦争というプロパガンダの、隠された構造を見事にえぐり出せる、希有な人でした。植民地主義というと太平洋戦争までの世界史で終わったのではないかと考える方も多いのではないのでしょうか。本当は終わっていなければならなかったはずのようですが、実は、現在進行形であるという認識を持つべきだと、高岩仁さんは映画というメディアを通して、明確に語ることができました。それぞれの映画に対で用意されてる小冊子は、映像の論理的裏付けを立証する貴重な資料集でもあります。

近代日本における在日朝鮮人は労働運動の先頭に立って活躍することが多かったようで、日本の体制にとって実に都合が悪く、それが為に、関東大震災に乗じての弾圧（7千人もの大虐殺行為）がおきたりしたと話して下さいました。制作中だった「教えられなかった戦争シリーズ朝鮮編」の資料をベッドの周りに山にしておられたそうです。

肝細胞癌で余命3ヶ月と宣告されてから2年後、72歳で逝かれました。私は貴方を忘れません。 合 掌

高岩さんはマルクス主義者か？

荒木 尊文

◆「マルクス主義者のビデオは推薦できない」—ある記者は会社で高岩さんの作品を紹介して、こう上司にどやされた。たしかに一昨年見た「戦争案内」は「資本が支配する日本は必ず侵略戦争を繰り返す」ことを、映像によって明らかにしている。だがそれだけで、マルクス主義者のレッテルを貼るだろうか？

◆資本制社会とは、人間がつくりだした資本が人間を支配する社会に他ならない。資本は、日常における貧困・抑圧・対立と恐慌の混乱、戦争の地獄をくりかえし人間に押しつける。人間は、この資本のヒドラと格闘し、これを人間の力の前に組み伏せる以外に、資本の圧政、ことに核戦争の破局から逃れるいかなるすべも持っていない。ではどうやって組み伏せるのか？

高岩さんはその回答を、私が最近見た「第二の侵略」で準備していた。映像のなかで、モロ・イスラム解放戦線議長ハジル・イクバル氏はこう訴えている。

「もし日本の労働者階級の人々がともに団結できなければ、近い将来の問題解決は期待できないでしょう。」

そうか！これを映像にしたことで、高岩さんはマルクス主義者といわれたのではないだろうか。マルクス主義の核心は「労働者階級だけが資本の『くびき』から人間全体を解放することができる」ことを訴えたところにあるのだから。

◆「私たちは楽しみにしています。日本で抑圧されている労働者階級の人々が、抑圧されたイスラム教徒の人々に理解を深めてくださることを」—現に日本資本がフィリピンを踏みにじっているときに、その資本を支えている日本の労働者階級に信頼をよせるとは！世界にはこんなすばらしい人格がいるのだ。

私たちが闘いの中で経験する無数の裏切りと落胆は、民衆への絶望、時には闘う仲間への不信さえ生む。この人間不信は、人間本来の底力、民衆の能力を見くびった、つまり資本の支配に屈した私たち自身の中から生まれてくる。

だが、それらはすべて資本の圧制のもとに抑え込まれた人間の仮の姿でしかない。イクバル氏が映像の中で言ったとおり、今では日本の誰もが資本の圧制を耐え難いと感じ、人間らしい生き方を求めているではないか。民衆、人間に対する無条件の信頼—これこそ私たちが彼から学ぶべきことではないだろうか。

◆私は高岩さんの作品を見て、生まれて初めて映像の持つ力に目を見張った。その映像は、彼が資本の暴虐に怒りをみなぎらせ、命までかけて撮影し、つくりあげたからこそ、人を動かす生命力を宿したに違いない。

横浜での葬送にならって、私たちは上野さん宅でインターナショナルを斉唱して高岩さんを偲んだ。マルクス主義者か否かはともかく、高岩さんはまちがいにインターナショナルによって葬送されるにふさわしい方であった。

高岩仁さんへの哀悼と感謝

上野 白湖

「ワルシャワ労働歌」がかくも鮮烈に力強く私の胸をかきたてる。高岩仁「戦争案内」のラストシーンである。21世紀を迎えた今、このような瞬間が私宅のテレビの前に現出されようとは！「暴虐の雲・敵の鉄鎖をうち砕け・立て同胞よ・砦の上に我らの誓い」などなどフレーズが駆けめぐる。私にも熱い血に燃え立つ日々があったのだ。

高岩さんご自身、資本の暴虐を告発し、そこに渾身の怒りと、虐げられし数知れない人々への限りない愛と連帯と、語り尽くせぬ思いを象徴的にこの壮大なオーケストラのメロディーに込めたのに違いない。

だから20代だった過去の私がどんなに怒りを込めて歌おうとも到底及ばなかった輝きで歌を蘇らせて贈ってくれたのだ。

その高岩さんはもういない。本当にいないのだ。私は何をしていただろう。取り返しのつかない無為の時間に自責が渦巻く。

ソ連が壊れようと、9・11があろうと、選挙で勝とうが負けようが、搾取や収奪を受ける者と、弱き者の命と富とを篡奪し尽くす者達との間に横たわる、階級というものは、厳然と存在し、更に今それは加速度的に広げられているのだ。

「第二の侵略」で私は己が無知の罪と恥を突きつけられ、日本の資本と政府の犯罪の上に、放恣な暮らしを貪っていることを知った。そして、こうした搾取と収奪の構造はますます顕在化し、アジア・アフリカのみならず世界中の、人の営みのある所全て・また人間のみならず生命ある緑も水も海も山も土も破壊し尽くし、犯罪者どもが自分達の掘った穴に転落する日まで続く。私たちの激しい抵抗を潰しながら。

そうであってはならないと、高岩さんは罪なき人々の、豊かで穏やかな暮らしを創るため、私たちの知らなくてはならないこと、つまり、私たちの敵なる勢力も、それに抵抗すべき人々も、見えにくくされてしまった、この状況を、想像を絶する執念と高い理想を抱き、長い戦後ずっと見失うことなく形に示しつつけてきたのだ。そう、敵が世界を収奪するなら、されるものも世界中果てしなく広がり連帯し、グローバルに固い誓いと団結を築き上げるだろう。「ワルシャワ労働歌」のように高らかに…それを私たちに語りかけたのだ。

それに引き替え、ゴミのような自分、道草ばかり食いつつ来てしまった。でもゴミの私だからゴミの意地をどこまでも貫いていくより生きる道はない。高岩さんの霊に背中を蹴飛ばされながら、その執念に私の執念を重ねていきたい。恐れ多いことではあるが高岩さんと同年の誼で許して頂こう。残り時間はあまりない。

教室のビデオ「戦争案内」から「君が代」へ 合田 恵子

私は、中学生を教える一音楽教師です。「非戦いぶり」で、ビデオ「戦争案内」を見る学習会に参加したのは昨年11月のことでした。私にはこれまで音楽教師としては、避けて通れない、卒業式などの「君が代」問題がありました。しかし正面からそのことに向き合わずに今日に至ってありました。この「戦争案内」は、そんな私に否応なく新しい一歩を踏み出させることになったのでした。

それは日本という国が戦前から戦後の今日まで、どのようにアジア諸国に暴虐の限りをつくし人々の命を奪い、私たちの想像に余る悪業を働いたかを具体的な資料や数字・映像で語ってくれました。更にそれは現在進行形で今なお多くのアジアの人々に犠牲を強い、日本の繁栄を支えさせられている事実も突きつけているものでした。

そこで私はこの「戦争案内」を中学3年生に見せることで子ども達に「日の丸君が代」は、天皇の名の下に戦争への道が強いられたこと、そして世界に誇れる平和憲法を持つ日本が、教育の場でなぜ不当な強制がはじまったのかを一緒に考えようとしたのです。

その結果、子ども達の反応はどうだったでしょうか。予想していたことではありましたが、子ども達は本当に知りませんでした。戦前のことはもちろん、現在の企業がアジア諸国で行っている罪科・形を変えた侵略という認識は全くありませんでした。現在のマスコミのあり方では知ることができないし考えるきっかけも与えられないのです。

私はここで自分の教師としての大切な仕事としてそのことを考えさせていきたいと痛感しました。

子どもたちの反応から見た場合、教師として何を与えたのかあまり自信がありませんでしたが、全体の半数程度の子ども達が共感してくれたという手応えがあったので、それだけでも取り上げた甲斐があったと思います。

そしてやってきた卒業式の「君が代」。3年生の全員が立っていました。これが現実です。でもいいのです。タネはゆっくり育っていくでしょう。

意外なことに入学式で、2年生一人だけ立たない生徒がいたのです。私は後日、その2年生の授業で心から謝りました。「君が代起立」には、立つ自由と立たない自由があると、はっきり伝えなかったことをです。

そして現在、東京などの教員に対する厳しい処分あるという現実も教えました。「しかし君たちは一人一人どうしたらいいかしっかり考えてほしい。小学校では自由なのにね」と。子ども達は驚くと同時に共感してくれました。

私は伝えるべき良心が伝わったと確信しました。この一連の経験は私にとって忘れ得ぬ大きな大きな一歩となったと思っています。 (2007年4月)

「戦争案内」—すごいビデオがあった！

荒木尊文

◆「このビデオは人を動かすぞ！」—高岩仁さんの「戦争案内」を見ているうちに、この確信が次第に深まっていく。11月25日、室蘭での学習会のことである。

なぜなら、私がみんなに訴えたいけどうまく言えず、もどかしく感じていることを、「戦争案内」はわかりやすく、かつ反駁の余地なく描き出しているからだ。それは、「暴虐非道のカネもうけをする日本企業とアジア人民の衝突、これがかつて日本を侵略戦争に駆り立てた。そして今再び駆り立てている」ということである。

◆ かつての日本のアジア侵略戦争は、日本軍の暴虐ばかりに焦点があてられがちだ。それはまちがっていない。だが、天皇と政府・軍部に侵略戦争を要求した本当の戦犯は、アジアに進出した鐘紡を中心とする日本企業であった。

今の日本企業がアジアでやっている傍若無人なカネもうけは、第二次大戦まで日本企業がアジアでしてきたこととまったく同じだ。それどころか、進出企業の規模も数もかつてとは比較にならない。昨年中国の反日暴動を見ても明らかのように、今や日本企業に対するアジアの人々の怒りが噴き出しているのだ。

「集团的自衛権の行使は、一刻を争う課題」。昨年日本経団連は、改憲提言の中にこう書いた。それは「日本軍による保護は一刻を争う課題」という、アジアに進出したトヨタを始めとする日本企業の悲鳴に他ならない。「集团的自衛権の行使」=戦争は、一般に言われるように、決してアメリカに言われたからやるのではない。

誕生したばかりの安倍政権は、教育基本法と憲法9条に手をかけてきた。安倍が狙う北朝鮮への戦争は、直接には韓国の日本企業を武力で守ろうというものだ。それは同時に「日本企業に逆らうと日本軍は黙っていない」という中国・東南アジアに対する脅しであり、必ずアジア全域を巻き込む大戦争へとつながっていく。

◆ 札幌での教育基本法反対1万人集会の感動を持ち帰った人をはじめ、この日の参加者全員がこの「戦争案内」に動かされた。「有名企業に就職して良かったね、なんてとてもいえない」—ある参加者のこの感性を、みんなで共有して大事にしたい。あらゆる人がこのビデオを見られる場をつくっていこう。

私は「戦争案内」のラストシーンを見て、いっそう、このビデオの虜になった。日産自動車に対するフィリピン労働者のストのシーンに、バックミュージックの「ワルシャワ労働歌」がせりあがっていく。それは、私が学生の頃、街頭デモでいつも学友達と歌った革命歌の中で一番好きだった歌である。

(2006年12月)

私の小さな一歩 「ビデオ上映会」

上野白湖

「一億総懺悔」それはとんでもない嘘だった。若い人は知らないと思う。1945年の敗戦で日本は全ての価値がひっくり返し、この言葉がみんなの中を駆け抜けた。日本中一人残らず同じ思いだったことをこの2年前まで疑ったことはなかった。無知が悔やまれる。

敗戦の飢餓状態がいくらも癒えぬ時、戦犯だったのに、いち早く政治家として返り咲いた人がアジアに金をばら撒きに出かけた。不思議でたまらなかった。それは間違いなく懺悔の外にいた人だった。そういう人達は間違った侵略戦争を繰り広げ、頂点に天皇をかついで人の命を奪い、収奪する事を当たり前として己が利益を貪った人々だ。その連中がいち早く息を吹き返したのだった。

5年前、私はドイツにいた。友達の夫のドイツ男性が過去に米英が支配していたアジアを今は日本がとってかわっていると抗議するような目で私に言った。唐突な言葉であり私は何と云っていいのかわからずヨーロッパの人々の底にある敵意のようなものと受け取った。何故なのかと時々考え続けていた。

しかし彼の言ったことは正しかった。知らないのは日本人だけでヨーロッパの人々は日常的に自国の置かれている状況を考え、その必然として他国についても高い認識をもっている。私は井の中の蛙だった。

高岩仁 制作 監督

教えられなかった戦争

フィリピン編 「第二の侵略」

このビデオの上映会を今年の五月に私の家で開き、集まってくれた皆さんと一緒に観た。そしてお粗末な私の不明に鉄槌を下してくれた。

フィリピンの人々が村ごと土地を追われ、難民として劣悪な環境に閉じ込められ、過酷な収奪に喘いでいる。抵抗する人々は容赦なく殺されて行く。そんな目に遭っているのは主にイスラムの人々である。

犯人は日本の大企業とフィリピン政府に他ならない。この映像をいっしょに観た私達は恥ずかしさと申し訳なさ、そんな言葉では済まされない心の悶えを抱えたのではないだろうか。

ニュースに流れるフィリピンのテロは、こうした人々のレジスタンスである。映像に現れた顔は優しさと威厳に満ちていた。世界中でテロと呼ばれて

いるものは殆どが自らの暮らしを守ろうとする止むに止まれぬ抵抗であり正当な行為であると改めて納得できた。

奪った土地は日本企業が近代的な大工場にオフィス、更に広大な果物や野菜・穀物の農場にしている。フィリピン政府の軍隊がしっかりガードしているからやりたい放題だ。

まだある。漁業で暮らしていた人々の海と浜を追いたてて、そこにも巨大な港ができていた。大企業にとって海外への輸出入は不可欠である。こうして大企業の原料から製品の流通は完結する。

いずれの場面でも土地を追われた人々を低賃金でこき使っている。行き場が無く、わずかな困いの中に押し込められ小屋のような狭い住居で家族よりそい、やっと寝起きしている人々である。

奪った土地に繁っていた古い巨木などは大量に日本に輸出される。日本の美しい大地はアジアの緑を奪って成り立っているのだろうか。

「第二の侵略」というタイトルは映し出された難民の女性が、かつての大戦での侵略、その後の独立がまた日本の侵略で奪われてしまった、あまりの所業に対して怒りと抗議から迸り出て叫びとなった言葉である。

私はこれまで活字こそが勉強の手段だと思っていた。しかしこのテープが私のビデオ開眼となった。活字ではつかめない多様な要素を一画面に示してくれる。読むだけではわからない、イメージにできないことをダイレクトに伝えてくれる。更に多人数で一つのものを観て互いの感動と認識を分かち合える。これは到底本や雑誌の及ぶところではない。

この日もそんな思いが集まった人それぞれにあったためか感想はたくさん出されたし、楽しくもあり映像のもたらした衝撃も確かめられた良い時間だった。集まった皆様は約二十人。何かをそれぞれに残してくれたビデオテープに感謝し、同時にこの映画を作った高岩仁という偉大な監督、命の危険を顧みず、当局の妨害を撥ね退け、現地の志ある協力者（そのために命を失った人もいる）の信頼を得て成し遂げた貴重な作品を私達にプレゼントしてくれた。私はその前に頭を垂れて感謝と畏敬の念を幾重にもお伝えしたいと思う。

私の家では昨年来、小さな集まりを持ってビデオを観ることが何度かあった。昨年韓国で二人の少女が米軍の戦車にひき殺された事件があった。韓国の国を挙げての怒りの抗議行動のビデオを観る事ができた。韓国の人にも沖縄の人にも改めて申し訳ない思いで一杯になった。

またアメリカの宇宙支配の危険を告発した「ニュークス・イン・スペース 2」ではプルとニュームを使った原子炉を積んだロケットが地球の周りを現在飛び回っているという。慄然とした。講演会のテープもあった。

私は米国の、アフガニスタンやイラクへの非道な侵略と日本政府の情けない状況の中で出来る事の一步として何度でも観たいものや観てほしいものを探して上映会を続けたいと心に期していた。「テープ」を買ったおかげで高岩さんからご案内を頂き、室蘭の仲間の骨折りで、映画と講演をしていただく事もできた。

こんなことをしているおかげで私は、周りになんて素敵な友達がたくさんいるのだろうと出会いの語らいと信頼の安らぎに幸せを得ている。ひょっとしたら目的はこっちではないのかとさえ思われてくるのだ。喜茂別の人や倶知安・大滝・伊達・室蘭・豊浦・虻田・そして札幌の皆さん・もちろん地元壮瞥の頼りになる面々。

次の計画は一月か二月のうちに

高岩 仁

「教えられなかった戦争」沖縄編

阿波根昌鴻 伊江島の戦い

を予定している。 良いテープを貸してくれる友達、また、めったに聞けない講演の録画ビデオを回してくれる活動家もいて計画は目白押しである。楽しみのカレーライスを提供できる能力の枯れるその日まで。

(2003年11月)



**阿波根昌鴻さん（沖縄）の
平和へのメッセージから**

**戦争は、支配者、権力者財閥と
その手先によって準備されます。**

**これらの階級の人々は
戦争が起きても
戦場に行って殺したり殺されたい
することはありません。**

**戦争を止める方法は？
「みんなで反対すれば
やめさせられる」**